

平成26年度主題研究

地域とのかかわりを通して、

確かな学びを育てる授業づくり

—「学び合い・生かし合い」を大切にされた総合的な学習の時間・生活科の取組を通して—

1. 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

近年の国際学力調査 (PISA 調査及び TIMSS 調査) の結果から、我が国の学力問題が提起されている。PISA 調査では「知識や技能等を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるか」(知識活用力) を重視し、読解力の他にも、数学的リテラシー、科学的リテラシー、問題解決力について調査している。全体を通して、論述形式の設問や実生活に関する設問で得点が低い。TIMSS 調査でも、算数・数学、理科の学力調査とは言え、様々な現代的課題や身近な生活体験、環境問題等に関する設問が多いが、全体を通して得点が低下している。いずれの調査でも、我が国の子どもたちの学ぶ意欲や学習習慣の低下が問題になっている。

また、国際社会で生き抜く上で必要とされるスキルとして 21 世紀型スキルがある。その内容や評価方法を検討する ATC21s (Assessment and Teaching of 21st Century Skills) という組織が定義している 21 世紀型スキルは、「思考の方法 ①創造力とイノベーション②批判的思考、問題解決、意思決定③学びの学習、メタ認知」「仕事の方法 ④コミュニケーション⑤コラボレーション」「仕事のツール ⑥情報リテラシー⑦情報通信技術 (ICT) に関するリテラシー」「社会生活 ⑧地域と国際社会での市民性⑨人生とキャリア設計⑩個人と社会における責任」の 4 カテゴリー 10 項目となっている。

このように国際的な様々な取組からも子どもたちに求められている 21 世紀型の学力は、実社会で活用できる能力であり、思考力・判断力・表現力等の能力である。その育成のためには、受動型の教育から探究型の教育へ転換が必須であり、各教科での習得や活用と生活科や総合的な学習の時間の体験を通じた探究が一層で重要であると考ええる。

さらに、平成 25 年度の学力・学習状況調査においての国語、算数と総合的な時間のクロス集計の結果をみると、『総合的な学習の時間』では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という設問と、国語、算数の結果の相関が出ており、特に B 問題 (活用) で顕著であることが明らかになり、探究的に学ばば学ぶほど、学力が高くなっている。

これらのことから、これからの学力向上には、実生活や国語、算数等の他教科と生活科、総合的な学習の時間をうまく連携させ、学びの場を充実させていくことが重要であると考ええる。

(2) 学習指導要領の趣旨から

総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとする。このことから、思考力・判断力・表現力が求められる「知識基盤社会」の時代においては、総合的な学習の時間は益々重要な役割を果たす。また、「小学校学習指導要領 総合的な学習の時間」の改善の具体的事項の(ク)には、「互いに教え合い学び合う活動や地域の人との意見交換など、他者と協同して課題を解決しようとする学習活動を重視するとともに、(中略) 探究的な活動を重視する」とある。

そこで、学習素材とする故郷大蔵の「ひと・もの・こと」とかかわって、探究的な学習を繰り返すことは、主体的な学習意欲を高めるとともに学んだことよさや価値を味わわせることができると考える。さらに、身近な人や社会・自然とのかかわりを充実させることが、児童の自立の基礎を養い自己の生き方への気付きにつながると考えた。

(3) 本校の学校教育目標から

本校の教育目標は、「心身ともに健康で体・徳・知の調和のとれた自主的で実行力のある児童の育成」である。

学習においては、児童が自らの力で、または他者と協力しながら、全力で問題解決に向けて取り組む姿を目指している。このような姿を具現化するためには、児童が心を揺さぶられ、「～せずにはいられない」と思わせるような「価値ある体験活動」を仕組むことが大切であると考え。

本校校区には、大蔵川を中心とした豊かな自然環境と、古くからこの地に住む人々によって脈々と受け継がれてきた歴史と文化がある。総合的な学習の時間の学習は、このような地域の自然・歴史・文化等を教材化することで、「価値ある体験活動」を展開することができる。

そこで、地域を学びのフィールドとし、児童の思いや願いに沿った単元構成や体験を通じた学習活動を充実させることを通して、児童の「確かな学び」を育てていきたいと考えた。

(4) 本校児童の実態から

昨年までの研究の取組から、以下のような児童の姿が明らかになっている。

- ・大蔵プランを基に、前学年で学習してきたこととのつながりや他教科等との関連を明確にして学習に取り組んだ結果、児童は生活科や総合的な学習の時間の学習を「学習が（とても）楽しい」と感じている。さらに、他教科での学習に「（とても）役に立った」と感じている児童が多い。

- ・コミュニケーションを軸とした活動を通して、友達のよいところに気付いたり、コミュニケーションによってお互いの気付きを共有することで、活動の中でいろいろなことを見付けたり、気付いたりできている。また、各教科等での言語活動を生かした話し合いや発信の場を探究の過程の中に位置付けた結果、思考力や言葉の力の高まりを実感している児童も多い。

- ・多面的に児童の評価活動を行ったことにより、「4月と比べてできることが増えた」「共同して活動や発表することができ、考えを広げることにつながった」と多くの児童が感じている。

- ・児童がまちづくりの在り方を地域の一員として考え発信し、地域の方から評価されることで満足感や成就感を味わうことができている。その結果、地域に対する愛情と誇りを深め、今後もまちづくりに参画していこうとする意欲をもつ姿が見られる。

- ・児童は大蔵を学びの場とした探究的な学習を通して、大蔵のまちを見つめ直し、よさや特色に気付いたり、理解を深めたりしながら、大蔵のひと・もの・こと・自然に愛情を深め、大切にしていこうとする気持ちをもつことができるようになってきた。

- ・身近な事象に対して「なぜ」「おかしいな」といった疑問を抱き、その疑問を既習の知識や技能を用いて解決しようとする姿勢はまだ十分に見られない。

- ・本校の児童は、一般的に総合的な学習の時間に対する関心や学習意欲が高く、これまでの学習経験からある程度問題解決するための方法も身に付けてきている。しかし、学習したことを言語によって分析したりまとめたり、論理的・効果的に表現したり意見を伝えたりする力が十分に育っていない児童もいる。また、興味・関心の個人差が大きく、自分の思いがもてなかつたり、学習意欲が持続しない児童もいる。さらに、他教科等で学習して身に付けた力や見方・考え方を総合的な学習の時間の活動に効果的に生かしきれていないのが現状である。

そこで、身近な地域の人・もの・ことを学習素材として何度も繰り返しかわり、課題追究の場を多く仕組むことによって、自ら問題解決する思考力・判断力をさらに高めることができると考える。また、他教科等の学習内容を関連付け、問題解決や探究活動を協同して行う学習活動を充実させることは、自分の考えをしっかりと話し合いに臨み、考えや意見を様々な方法で表出していく（伝えていく）ことにつながり、児童の情報活用能力やコミュニケーション能力など問題解決に必要なとされる学力を向上させることになると思う。

(5) 地域の課題から

本校の校区は、人口が約7000人、世帯数3900世帯（1世帯平均2.0人）が暮らしている。校区の人口は年々減少し、人口構成は65才以上の高齢者約3000人（高齢化率38.5%）、14才以下の子ども数約700人（構成比8.8%）で、大蔵の高齢化率は、2040年代の日本の姿を先行してい

る。(八幡東区の20年先を先行している。)そのため、婦人会、子ども会、老人会がなくなったり、地域の絆の希薄化が進んだりしていることが課題となっている。

校区の中央に大蔵川が流れ、東西は丘陵地となっている。川を中心に森など自然が豊かであるが、地形的には80%が急傾斜地であり、急坂や狭い道等で前述の高齢化と重なって、高齢者の引きこもりが増加している課題がある。さらに、交通の便が悪く、タクシーも通れなく買い物が困難であったり、長い坂や石の階段が多く消防車が近くまで来られないところがあったりすることも課題となっている。

これらの課題の解決のため、地域では「地域のことは、地域で考え、解決する」をコンセプトとして様々な取組を行っている。特に、小学校は、地域の様々な関係機関・組織の中心に位置付けられ、地域の方がゲストティーチャーとして積極的に関わってくださっている。また、地域の方々の学びの場としても機能している。地域では、「幼老が社会(地域)の真ん中で暮らす」ことを目指し、生活科や総合的な学習の時間の学習との連携を深めたり、大蔵ウェルクラブの実施等、次の世代の地域福祉の担い手となる児童を育成していく取組を進めたりしている。

そこで、地域の課題やよさを教材化し、児童が体験活動を通して探究的・協同的な学習を進めることは、地域の課題の解決と願いの実現に向け、地域の一員として主体的に行動していこうとする力を高めることにつながり、地域のニーズに応えることになると考える。

2. 主題の意味

(1) 「地域との関わりを通して」とは

地域の自然や事象、人物を中核に据えた教材を開発し、児童にとって価値ある学びを展開すること。

児童の生活経験の場である「地域」は、様々な自然や事象があり、人々の営みがある。そこには、教科・領域の本質に迫る多くの素材が存在する。それらを効果的に教材化し、地域を学びの場とすれば、児童の具体的な学習活動や体験が展開できる。そこでは、児童自らが地域に働きかけ、思考力や判断力、表現力を駆使しながら、問題解決を図っていく。そして、その過程の中で、自己への気付きや生活に生かす力を深めていくことができると考える。

(2) 「確かな学び」とは

自ら進んで地域に働きかけ、問題解決の過程で、思考力や判断力、表現力を駆使しながら、自己への気付きや生活に生かす力を深めること。

児童の『生きる力』を育むためには、基礎的・基本的な知識、技能の確実な習得に加え、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力などの育成」が必要である。児童の「確かな学び」は、身に付けた知識や技能を活用し、応用することによって高められ、言葉や行動によって表出されなければならない。そのためには、問題解決の過程で、思考力や判断力、表現力を駆使しながら探究的な活動を充実させることが重要であり、そのことが確かな学びの結果としての「自己への気付きや生活に生かす力」を深めることにつながると考える。

3. 3期目第1年次(平成26年度)の研究

(1) 研究の目標

地域のひと・もの・ことを学習素材として教材化し、探究活動を協同して行う学習体験を積み重ねることを通して、子どもたち一人一人が大蔵のまちのよさや魅力を実感させるとともに、自ら地域に働きかける態度や情報活用能力やコミュニケーション能力などの問題解決に必要な学ぶ力を育てる。

(2) 研究の仮説

地域のひと・もの・ことを学習素材として教材化し、子ども相互の学び合いや生かし合いを大切にしたい。探究的な学習を工夫・改善していけば、子どもたち一人一人が大蔵のまちのよさや魅力を実感しながら、生きて働く確かな学力を身に付け、自己への気付きや生活に生かす力を深めていくであろう。

〔手立て1〕 単元構成を見直し、新カリキュラムの作成とその試行的実践を行う。

〔手立て2〕 探究的な学習を一層充実させるための指導方法を検討し、実践する。

〔手立て3〕 他教科等との関連を重視した指導計画を作成し、確かな学力を身に付けさせる。

(3) 仮説実証のための具体的な手立て

① 単元構成の見直し、新カリキュラムの作成とその試行的実践について

これまでの大蔵プラン（学校カリキュラム）による総合的な学習の時間の1単元70時間の構成を、例えばそれぞれの学年に必要とされる問題解決の仕方を学ぶ学習活動（パート1）とパート1で身に付けた力を発揮させる核となる学習活動（パート2）の2単元の内容構成にしたり、既存の単元を2つに分割してコンパクト化し、2つのテーマに基づいた学習を関連付けながら発展的に行ったりするなどの改善を図り、新大蔵プラン（新学校カリキュラム）を編成する。生活科においても、教科のねらいをおさえ、単元構成を見直す。新たに編成されたプランを基に、実践を行い、プランの妥当性を検討する。

② 探究的な学習を一層充実させるための指導方法の検討とその実践について

探究的な学習を一層充実させるために、情報活用能力（情報の収集・整理分析等）やコミュニケーション能力を高める指導を学年の発達段階に応じて意図的・継続的に行う。また、考えを深めさせる学び合いの場や学習成果を生かし合う場を指導計画に効果的に位置付け、学びの質を高めるようにする。さらに、ポートフォリオを効果的に活用する授業を工夫し、児童自身が自己の学びの成長を実感できるようにする。

③ 他教科等との関連を重視した指導計画の作成について

確かな学力の向上に向け、教科で習得した知識・理解、技能等を探究のプロセスの中で活用し、相互に関連付け生かすことができる指導計画を作成する。さらに、目標や評価の観点を見直すとともに、構造的で分かりやすくスリム化した指導案形式にまとめ実践を行う。実践の成果については、児童の実態（変容）調査を軸にして、ポートフォリオや授業記録、児童の実態調査等の分析を行い、検討・評価する。

4. 研究の実際

(1) 本年度の研修計画

本年度は、研究主題を「地域との関わりを通して、確かな学びを育てる授業づくり」、サブテーマを「「学び合い・生かし合い」を大切にしたい総合的な学習の時間・生活科の取組を通して」として、第3期目第1年次の研究を進めてきた。今年度の研究においては、第2期の課題を受け、「学び合い・生かし合い」をキーワードに今まで培ってきた地域への愛情や誇りをより一層深めることをねらいとしたものである。また、「学校大好きオンリーワン事業」第3期目1年次授業公開（11月28日開催）において総合的な学習の時間の授業を第3・6学年が提案し、本校の研究実践を発信するとともに、全市的な研修の場とした。そして、研究を組織的・計画的に推進することを通して、教職員一人一人の授業力の向上を図った。授業研究の前には、必ず事前研修（指導案検討会）と事後研修（協議会）を行うこととした。さらに、年度末には、児童の学びの姿を基に研究の成果と課題を明確にし、次年度の研究へとつないでいく。